

2017 年度共同研究班 研究成果報告書

研究名：命の水でつながる沖縄とスリランカの互恵的關係

代表者：ディリープ・チャンドララール

2015 年の「スリランカ命の水プロジェクト」に関する背景調査では、なぜこれまでバルンガラ村に水道設備が設置されなかったのか、また村の人々の経済事情や生活はどのような状態であるかを明らかにするためのインタビューを行なった。

2016 年は、2015 年 8 月に山寺までの水道が完成した後に 2016 年 3 月にポルガハウエラ市からの支援を受け各家庭（50 世帯）までパイプが届き、継続した水道維持管理の状況確認を行った。また、プロジェクトの目標が「村人が主役となり、計画・完成後の維持・管理を含めて行う、現地住民参加型事業」であることを前提にし、その実態を把握するため、ECD-DAC 評価 5 項目による基準評価による実態調査を行った。

2017 年の春頃、沖縄スリランカ友好協会にバルンガラ村の隣の村まで水道がとどいているらしいとの情報が届いたので、2017 年は、水プロジェクトのさらなる効果に関する実態調査することにした。調査方法としては、村人や代表である僧侶へのインタビュー調査を行い、以下 2 つの項目でまとめた。

1. バルンガラ村と隣のアタラガラ村の現状
2. 国際相互扶助の課題と沖縄とスリランカの互恵的關係の方向性

1. バルンガラ村とアタラガラ村の現状

バルンガラ村の水道設置が日本の募金活動で実現したことで村人が前向きになった。またその自信が、これまで社会的に弱者であった村の住民が、行政に対して声を強く上げ、「日本人は支援をしてくれたのになぜ政府は何もしないのか？」と言えるような状態につながり、水プロジェクトは声なき民の声が行政を動かした例である。

「命の水プロジェクト」開始前は、何度も地元自治体に水道敷設の要請をしていたが、村人たちの要請や行動が生活水準の向上に結び付かず、村人の間に「どうせ申請しても無駄」「自治体は動いてくれない」などのマイナス意識が蔓延していた。

2015 年、沖縄スリランカ友好協会が、村人の長年の夢であった水道を完成させたことで、バルンガラ村の人々の意識が変化し、「遠く離れた日本人がスリランカの人々の為に行動してくれているのに、同じスリランカ人である地元自治体は動いてくれないのか？」と自分たちの権利を主張し、コミュニティ（村）の為に行動し、自治体を動かし水道工事をしてもらい各家庭にまで水道のパイプを通してもらったという。

村に水道が完成したことで、村人に「自分たちの力で村の生活を向上していくことができる」という自信が芽生え意識も変わりつつあるように感じられた。

2017年8月の調査の時点では、麓の水道タンクに自治体がもう1基ポンプを設置してくれたため、送水ポンプは2基となっていた。山頂のタンクへの送水も1つのポンプが故障しても、もう1つのポンプで送水できるなど、断水しないように自治体もサポートしてくれているようである。

バルンガラ村からスリーウィラー（三輪自動車）も通れないような山道を登り下りしながら歩いていくとアタラガラ村である。バルンガラ村の頂上のタンクから隣の村にまで水道の恩恵が届いているということが、水プロジェクトに関わった沖縄の人々にとってはいい意味で予想外の事でもある。

村の入り口に水色のプラスチック製タンクがまず1基。塩ビのパイプでバルンガラ村頂上のタンクから送水されている。（アタラガラ村の一番低いところにあるタンク）そして村の中腹に黒いプラスチックのタンクが1基。二人ほどが通れる幅のコンクリートの階段を上ったところにさらに黒いプラスチックのタンクが2基。一つは村人の知人から借りているもの、もう一つはユニセフの支援により設置（タンクにユニセフのロゴマークがある）。

以前アタラガラ村では、母親が子どもの着替えを持って山道を下り、水道が通っている麓の水場で学校帰りの子どもを迎え、そこで水浴び・シャワーをすまし水汲みしながら帰宅するという生活パターンをとっている家族もいた。村で暮らす老齢の父親のために、街で仕事をしている息子が週に1回、1週間分の水20個ものポリタンクをスリーウィラーで2～3往復して運んでいたという。

「相互扶助の精神」は寺を中心としたバルンガラ村とアタラガラ村にあり、両村の住民が自治体の協力も得ながらお互いをサポートしている。アタラガラ村の12世帯と頂上タンクの水をシェアしても、バルンガラ村の生活になんら支障がないと理解できたところで、バルンガラ村の水道管理組合を拡大し、村人が同じ寺に集うもの同志として、水の恩恵を分かち合えることを嬉しく思っているようである。

アタラガラ村でも、水道管理組合のシステムが機能しており、きちんとメーターをチェックして水道料金の徴収を行っている。

そしてアタラガラ村の人々は、水道敷設に尽力した沖縄スリランカ友好協会や沖縄の方々へ感謝の気持ちを伝えている。感謝の言葉に満ちた両組合の合同会議議事録が沖縄スリランカ友好協会に届いたばかりである。

2. 国際相互扶助の課題と沖縄とスリランカの互恵的関係の方向性について

近年の開発援助は、インフラ整備中心の開発プロジェクトから、地域住民の教育、保健衛生、生活環境の意識向上などの住民主体の開発による質的転換を示すことが求められている。その点でこのプロジェクトは住民参加型共同体モデルの構築に貢献できたのではないと思う。また、水プロジェクトの影響はスリランカ、すなわち援助される側だけではなく、援助する側の沖縄にも及ぶ。メンバーによるプロジェクト参加や体験談を話すこと

が日本の若者に国際交流の可能性、夢の実現に導くものであると考える。

さらに、2015年に、沖縄県の国際協力人材育成事業（7月25日～8月1日）や、県内高校の民間レベルのスリランカボランティア体験ツアー（8月1日～13日）に参加した高校生がバルンガラ村を訪ねた。また2015年と2016年12月に渡嘉敷青少年の家主催の「アジアの架け橋 沖縄スリランカプロジェクト～命と平和を次の世代へ～」でスリランカ派遣した中学生（8名）がバルンガラ村を訪ね、住民の精神的拠りどころになっているお寺でPadawigampala Gunarathana 僧侶の指導の下、瞑想訓練を受けた。2017年8月に沖縄大学のスタディツアーと沖縄スリランカ友好協会共催のツアーの参加者が村を訪ね、交流を図った。これらの交流は、水プロジェクトの実施が沖縄の若者の国際交流・国際協力への関心を高めることにも繋がった。グローバル時代のなか、社会や企業が「人財」に重点を置いており、こうした国際交流で生まれる異文化コミュニケーションは、言語、文化や肌の色がまったく違う相手を考える機会を与え、多種多様な視点を養うことができる。また自分自身を見つめるきっかけとなり、広く相対的な視点で日本を考える事にも繋がるなど、若い頃のこうした体験は重要だと思われる。

本研究は、沖縄のユイマール精神とスリランカのお寺を中心としたコミュニティー精神が当プロジェクトの実施、成功、効果に大いに貢献し、沖縄とスリランカの互恵的關係と自立型の国際協力の試みに役に立ち、グローバルな絆を築くことができたことを証明した。

但し、課題としては汚水処理の問題、また軽減された水くみの時間が、子供達の勉強や趣味に費やされていることで、将来のビジョンとしてどう生かせることが出来るのか、継続した経過観察が必要だと思われる。

論文の要約

本稿は、沖縄スリランカ友好協会が2013年から2015年までに実施した「スリランカ命の水プロジェクト」（以下水プロジェクトと呼ぶ）を参加型開発プロジェクトとして捉え、開発援助の計画、立案、実施、評価のすべての段階においてどのような「参加」があり、どのような課題にぶつかり、どのような効果を発揮できたのかを分析し、開発援助のやり方に示唆を与える。実施状況は「参加型開発」の概念を通じて、そして評価過程は「参加型評価」の概念を通じて分析する。

インドという大国の傍で、さらに遠くにある中国の影響を受けながらも独自の発展を遂げ、しかも内戦を終結した島嶼国であるスリランカに対して、どのような支援が行われ、それがどのような効果をもたらし、どのように受け止められているのかについての考察が、今後アジアにおける日本の役割と民間交流・協力の在り方を考える上で重要と考える。

2013年沖縄スリランカ友好協会が始めた水プロジェクトが2015年に終了し、スリランカクルネーガラ県、バルンガラ村に水道を設置することができた。2016年に各家庭まで水道

が敷かれ、地域や自治体などにも影響を及ぼす事業になった。経済的な意味での支援に留まらず、まちづくり、集落の文化保存、協力的行動の原点などの文化的意味での支援を考えると、沖縄スリランカ友好協会の水プロジェクトが重要な役割を果たしてきたと考えられる。

水プロジェクトがどのような役割を果たしてきたか、地域の住民の考え方や村に傳承されている精神文化がどのような土台を作っていたか、双方の交流やニーズのマッチングがどのように行われてきたのかを明らかにすることによって、本来あるべき自立型の国際協力のあり方が見えてくる。

エドガー・シャインが示すように(Schein, 2009)、「支援」は社会的プロセスであり、そのうえに「援助活動」は対人関係や文化のルールに左右されるので、開発援助も異文化間のアクターによる社会的プロセスに当たり、また「国際協力」の分野でも非対称の関係は決して珍しいことではない。社会人類学者のモス (Mosse, 2005) も開発援助の実施や成功が社会的に構築されるものとし、非対称的な関係の実態が現れることに注意を払っている。

そこでまず、スリランカの水事情と水をめぐる政治経済的状況、特に水プロジェクトの対象地域であるバルンガラ村の地理的状況、さらに貧困や土地の問題などで困難な状況におかれている住民の生活を描くことによって、なぜこの村に開発援助が必要であったのかを説明した。また水プロジェクトがどのように生まれたのか、その背景も記述した。水プロジェクトの実施実態と直面する様々な課題を把握するために、社会科学研究に基づいた考察が必要であることも確認した。

次に、水プロジェクトは地域の住民を主役にした、住民参加型開発事業であることを検証し、それに合うような支援を行ってきたことを証明する試みをした。プロジェクトの計画、立案、実施、評価のすべての段階において地域住民とコミュニケーションをとり、相談・交渉しながら進められた様子だけではなく、援助する側とされる側の信頼関係の構築にあたってどのような阻害があったのかという実態も記述した。従来の参加型開発の議論において誰が参加するのかというと、大体途上国の援助される側の住民が相当するが、本研究においては援助する側の沖縄の住民の参加の様子も考慮に入れて検討した。そこには互恵的関係の基盤が存在する。援助者が実施地域を見る際に必要な視点として、文化的に適切なアプローチかという点の重要性も強調した。バルンガラ村のお寺を中心とした精神文化と人間関係が当プロジェクトの効果的達成に役立ったことは忘れてはならない。参加型開発の一環として実施された水プロジェクトがバルンガラ村の住民の市民としての意識を醸成することにかに貢献したのか、証明した。

社会的課題の解決には、実施される計画の評価が特定の専門家のみによる実施ではなく、異なる社会のアクターが関わって行うのが望ましいという考え方がある。そのような利害関係者の参加とそれによってもたらされる効果が従来型評価と参加型評価の大きな違いであろう。参加型評価を通して市民参加の場を設けることで、援助実務者と援助受益者といった二分法の関係における不平等を正せることもできると思われる。水プロジェクトの評価もその作業と責任が、評価の専門家集団ではなく、プロジェクト実施者とその関係者によつ

て担当されたので、参加型評価として扱うことができるというのが筆者の主張である。データの分析や解釈などの専門的な過程にまで村の代表者が関わらなくても、プロセス評価、インパクト評価、アウトカム評価などのすべての段階において地域住民と対話しながら評価していくことにしていた。

ロッシ他(Rossi et al, 2004)にしたがって、プログラム内容の評価にあたって、このプロジェクトは何をめざして実施したのか、誰のために実施したのか、どんな活動が行われたのかなどの点からプロジェクトの手段と目的の関係を示すプログラム・セオリーとロジックモデルを活用することにした。水プロジェクトの実施は実施地域の住民組織化、具体的に言えば、バルンガラ村の水道消費協会の設立、その活動活性化につながったことが明らかになった。プロジェクト実施において住民参加は手段としてだけでなく、目的としても現れて、女性や子供のエンパワーメントにつながったこともわかる。

開発援助のプロジェクトを終了した時点で援助事務者が実施地域を離れるのはそんなに珍しいことではない。沖縄スリランカ友好協会は、水プロジェクトを完成させ、これでわれわれの役割は終わりとして手放すのではなく、なぜこれまでバルンガラ村に水道設備が設置されてこなかったのか、また村の人々の経済事情や生活はどのような状態であるのかを明らかにするためのインタビュー調査を2015年に行ない、さらに、水道設備が敷かれた後の子ども達の将来に役立つ事ができるよう、子ども達の将来に関するビジョンボードづくりのワークショップも行った。(『地域研究、17号)参照)。将来に向けて目標設定とそれを実現するための手段を考えることもエンパワーメントの流れである。沖縄スリランカ友好協会が実施した水道プロジェクトの対象地域はバルンガラ村に限られていたが、その後、隣の村アタラガラの住民が地域自治体に声をかけ、政府の協力で当村にも水道施設ができ水が届いたことが、当初予定していなかったプラスの影響であり、水プロジェクトのインパクトをさらに拡大した例である。地域住民が自信をもって政府役員と交渉する力をもつようになったこともエンパワーメントの一部である。

参加型評価は利害関係者の認識、態度、考え方に影響を与える場を提供していて、それがスリランカの実施地域と沖縄の両方の関係者間の学習過程として大きな役割を果たしていたことも明らかになった。対話に重点を置いた、コミュニケーションを中心とした参加型評価プロセスの中で気づいた点が多く、参加者各自の省察(Reflection)の機会も与えてくれたことも大きな意味がある。社会の変化を求めて活動する団体やメンバー各自はその活動を自分たちが変わるための手段として活用してもいいと思う。

水プロジェクトの実施はその参加を通して日本の若者に国際協力への関心を高める場を提供していた。さらに、2015年に水プロジェクトを完成してから2017年の末までに沖縄から中学生、高校生、大学生や社会人を含む5団体がバルンガラ村を訪ね、水道施設を視察し、お寺を中心に交流を図った。

2016年に、日本住宅協会が沖縄スリランカ協会に国際居住年奨励賞を贈った理由は、特に水プロジェクトを通して、住民参加型共同体モデルの構築に貢献し、住民自身が豊かにな

ることへの意識づくりに貢献するとともに、スリランカと沖縄における異なる互いの文化や伝統を尊重し合い、日本の若者に国際協力への関心を高める活動に取り組んだことだとされている。これは水プロジェクトに対する第三者からの評価に当たるとも言える。

最後に、本研究は、沖縄のユイマール精神とスリランカのお寺を中心としたコミュニティ精神が「スリランカ命の水プロジェクト」の実施、評価、成功、効果に大いに貢献し、沖縄とスリランカの互惠的關係と自立型の国際協力の試みに役に立ち、グローバルな絆を築くことができたことを証明した。